

題目：ケアの概念としてのオムソーリ (Omsorg) を考察する

短時間のホームヘルプで独居できるスウェーデンの認知症の人たち

保健医療学専攻・医療福祉ジャーナリズム分野

学籍番号：12S3048 氏名：藤原 瑠美(八鳥)

研究指導教員：大熊由紀子教授

キーワード：オムソーリ 認知症ケア スウェーデン ホームヘルプ

1 研究の背景と目的

スウェーデン南端の人口 3 万人の地方都市、エスロブ市で高齢者ケアの定点観測を続け、8 年間で 2 冊の書籍にまとめた。継続的に観察してゆくうちに、同市では、認知症になっても多くの人が独り暮らしができていたという事実に気付いた。その背景を分析する中で、undersköterska（本論文ではアンダーナースと記述）という医療知識を身につけた介護スタッフがカギを握っていることが明らかになった。

1970 年代末、社会保障・福祉制度の質を高めるため、スウェーデンでは、オムソーリ (Omsorg) という古い言葉を社会化する研究が始まった。この言葉は「いたむ」(sörja) という語に類似し、介護という実働の側面と感情的な側面の二面性をもつ概念である。エスロブ市では、400 人の市の職員アンダーナースの手にオムソーリ (Omsorg) のケアが委ねられていた。オムソーリ (Omsorg) の概念がケアの質をどのように高めているのか。高齢者の潜在能力に働きかけ、自立性を引き出しているのかを現場で確認する。さらに国や文化が違っても、日本にも有益で普遍的な概念であることを考察するのが目的である。

2 方法

定点観測で入手した現場の事実を、医療から暮らしに転換したスウェーデンの高齢者ケアの歴史と合わせて把握する（藤原瑠美 2013 文献 1）。調査及びインタビューの対象を「ホームヘルプ」と「デイサービスで行う訪問サービス」に絞った。アンダーナースの働き方、動作と発声、考え方や生きる姿勢を調査。オムソーリ (Omsorg) の概念が内包されているかを明らかにしようと試みた。2014 年 11 月、認知症専門看護師、認知症コーディネーター、及び数人のアンダーナースへの追加調査を行った。

文献としては、アンダーナースの教科書（アニータ・カンザスフィール オルガ・ウィルヘルムソン 2012 文献 2）、保健福祉庁のガイドライン『高齢者の社会サービス (Social Omsorg) における 介護スタッフの基本的な知識』(Socialstyrelsen sosfs 2011 文献 3) を分析した。先行研究は、マルタ・セベヘリ (Marta Szebehely) の概念から多くのインスピレーションを得た（斎藤弥生 2014 /Szebehely 1996. 22 文献 4）。

3 結果

① マルタ・セベヘリによるオムソーリ (Omsorg) の概念

エスロブ市で見たアンダーナースの働き方は、マルタ・セベヘリによるオムソーリ (Omsorg) の概念と照合できるものであった。オムソーリ (Omsorg) は、A 感情を持つ人間によって営まれる、入念な(noggrannhet)、心遣いのある(omtanke) 実際の働きである。B 関係者間の関係性が問われる概念である。C 働き方とともに質が問われる概念である。（斎藤弥生 2014 /Szebehely 1996. 22 文献 5）

② 国の認知症経費の 85%が福祉ケアに使われ、医療は 5%

スウェーデンは認知症ケアの軸足を医療から福祉に転換した。認知症の総経費の 85%を福祉ケアで占めている (socialstyrelsen 2007 文献 6)。一般医療専門医は「医師にしかできない仕事は診断である。認知症の診断には 6 か月がかかる (WHO の認知症の定義から)」「診断が終わると福祉・ケアの手に委ねる」「認知症の人に正しく接することで症状を悪化させない」と語った (私信, personal communication)。医療、看護、介護の現場に合意があった。就労の機会が多い都市部と違い、地方都市ではアンダーナースが主役であった。

③ ホームヘルプの認知症の利用者は45%が独居で、64%が軽度

認知症になっても独居できる理由は、家族介護や地域の見守りなどがある。しかし最大の要因は、認知症が悪化していないからである (Socialstyrelsen 2007 文献7)。ホームヘルプ利用の認知症の人の64%が軽度で、ホームヘルプの滞在時間は月1時間から9時間が35%と短時間の利用が多い。(Socialstyrelsen 2007 文献8)

④ ホームヘルプ15分の訪問にみたオムソーリ (Omsorg)

短時間のホームヘルプに同行取材して、技術力に裏付けされたアンダーナースのケアを見た。スウェーデンでは家事援助 (掃除・洗濯・調理) をホームヘルプから分離させ、ニーズに応える対人援助に特化した (身体介護が必要な利用者は少ない)。アンダーナースは、友人のような関係づくり、短時間でも豊富な会話、気配り・機転を心がけている。仕事は手早いが気ぜわしさが無い (藤原瑠美 2013.7 文献9)。

⑤ デイサービスに併設された訪問サービスにみるオムソーリ (Omsorg)

デイサービス所属の認知症コーディネーターと認知症生活支援係はミッションに裏打ちされた働きをしていた。それは「感情をもつ人間によって営まれる、入念で心遣いある支援」であった。高齢の利用者の喪失感 (いたみ) に共鳴するケアであった、8年の調査機関中、利用者の認知症の悪化は緩やかだった。

⑥ オムソーリ (Omsorg) は自立心を育む

エスロプ市のリハビリ部門の管理主任スタッフアン・オルソンは「喪失感を味わった高齢者のリハビリでスタッフが厳しく接するのは逆効果と語った。スタッフが温かく接すると高齢者は心を開く。安心することで自信が生まれ、前の生活を取り戻そうという意欲が内側から湧いてくる」とも語った (藤原瑠美 2009 文献10)。安心が残存能力に働きかけ認知症の悪化を防ぐ。ケア提供者自身のやり甲斐にもつながる。流れ作業のようなケアは高齢者の自尊心を傷つけ、自立心を損なう。ケアスタッフにとっても働きにくい。

4 考察

スウェーデンは1972年に世界でいち早く高齢社会を迎えた。政府の未来研究審議会 (Sekretariatet för framtidsstudier) が70年代末、オムソーリ (Omsorg) という古い言葉の社会化に着手、社会保障の基を築いた。Social Omsorg である。それまでは, socialvård という言葉が使われていた。vård は医療に近い言葉である。セベヘリは Vård には病気が回復するという意味があるが、オムソーリ (Omsorg) にはその状態にとどまるか、悪化する、という意味が含まれていると書いている (齊藤弥生 /Szebehely 1996.22 文献11)。

高齢期の対処は vård ではなく Omsorg での対応に切りかえたのだ。vård には感情が伴わないが、Omsorg には感情がともなっている。未来社会に向けて、高齢者ケアには豊かな感情の交流が必要で、疾患を徹底して治療しないという考えが打ち出されたのだ。

5 結語

2035年、日本は団塊世代が85歳を超える。85歳を過ぎると認知症の発症率が高くなる。今世紀中には認知症の根治薬の開発は難しいと言われることから、手を尽くさないでいると、未曾有の困難な時代を迎える。次世代に持続可能な社会を引き継ぐために、認知症の人の症状の重度化を防げる予防型ケア・メソッドを介護の現場に早急に開発する必要がある。オムソーリ (Omsorg) は生き物である。オムソーリ (Omsorg) が働くためには、ケアを担うスタッフの社会的地位の向上と安定が不可欠である。国や文化風土が違っても、オムソーリ (Omsorg) は日本にとって有益な概念であり、その歴史的考察は今日的な課題である。

- ・藤原瑠美『ニルスの国の認知症ケア ― 医療から暮らしに転換したスウェーデン』ドメス出版 2013年 1; P65、9; P51
- ・アニータ・カンザスフィール オルガ・ウィルヘルムソン著、ハンソン・由美子、日比野茜、楠野寿透子訳 古橋エツ子監修『スウェーデンにおけるケア概念と実践 (Vård och omsorgsarbete)』ノルディック出版2012年 2:P84
- ・Socialstyrelsen sosfs 2011-2 3;
- ・齊藤弥生『スウェーデンにみる高齢者介護の供給と編成』(大阪大学出版会) 2014 4, 5; P129、11: P60
- ・Socialstyrelsen (2007) Demenssjukdomarnas samhällskostnader och antalet dementa i Sverige 2005 6;
- ・Socialstyrelsen (2009) Äldre-vård och omsorg den 30 juni 2008 8